

生田長江集

一の信條

中田長江

私は信じてゐる。一、神に對するもの、
人と、人とに對するもの、善と、
善とに對するもの、美と、此三者は
神に對するもの、聖に對するもの、
神に對するもの、三位一體となすことなる。

圓

光

(三幕)

人物

辰巳一郎

三十歳前後。美術家にして文學者。

歌津子

二十二歳。

貞雄

十一二歳。歌津子の異母弟。

歌津子の繼母。

武田忠夫

辰巳と同年位。歌津子の繼母の甥。軍人。

みつる

忠夫の妹。歌津子より一つ二つ年下。

今村順

辰巳より四つ五つ年上。美術家。

仲子

今村の共同生活者。三十歳近く。

其他二三人

第一幕

(東京市の郊外、辰巳一郎の畫室。正)

面の大きな玻璃窓から流れ込む晩春の日暮近い柔かな光線が、椅子、テーブル、繪具箱、ピアノなどの上に落ちてゐる。老婢が、絨氈の上にこぼれたインクの汚點かなんぞを拭つてゐるところにて幕上る。

一郎。(置時計のゼンマイをかけながら) もう可いよ、ばあや。それ位で可い。

老婢。でも、まだ斯んなでございますもの。もう少し綺麗に拭いて置きますせう。

一郎。いや、もう可い、もう可い。

老婢。(やつと起ち上り) 左様でございますか。……ほかに何か御用は?

一郎。さうさな、別に……

老婢。あの、御客様が御見えになりますと、直ぐ、御一緒にお出掛けでございますか? 直ぐに?

一郎。うむ、直ぐに出掛ける。そして夕飯の支度もしないで可い。お客様と一緒にそとで食べるつもりだから。

老婢。左様でございますか。それぢや、(玄關の方からの物音を聞きつけたる如く)……おや、もう御客様のやうでございすね。

一郎。(玻璃窓に近づき、裏木戸の方をのぞいて見ながら) ちがふよ。歌津・さんは、此頃はいつでも裏の方からだよ、(表玄關へ續く入口の方へふりかへりながら) 誰かしら。生憎な時にやつて來あがるな。丁度一年目の記念日を、これから祝はうとしてゐるのに。

老婢。(入口の扉に手を掛けて) 斷つてしまひませうか。

順。(老婢と同時に扉を開き、躊躇るやうにして入る) おつと危い! 失敬、失敬。

老婢。おや、今村様でございましたか。(出て行く。)

一郎。ああ、君か!

順。うむ、僕だ。

一郎。(椅子を押し勧めながら) 其後、どうしてゐた?

順。やつぱり生きてゐたよ。

一郎。暫く來なかつたね。

順。うむ。然う言つて呉れると助かるがね。實はその暫くぶりで又少々ばかりこれを(左の股に注射器をあてがふ手眞似をする) 御厄

介になりに来たのさ。

一郎。モレヒネを買ふお錢をかい？

順。うむ。成るべくならば、強請に來ないで済ましたいんだけどね。そこが、それ、矢張どうも。

一郎。（黙つて蠟草の簾を客の前へ押しやり、仰向いて目をつぶりながら）君の其モヒ中毒ももう、到底治る見込がないのかねえ？ 何

とかして治せないものかねえ？

順。駄目、駄目。斯うなつた原因も意志薄弱だが、斯う成つた結果は、一層意志を薄弱にする。もう自分から、治さうと云ふ氣にもなれないんだよ。

一郎。それで、矢張注射の分量が多くなるのかい？

順。うむ。だが、それより困るのは藥の高くなつた事だ。此頃では、どんなにしても一日分が一圓近くかかるんだからな。先達てなぞ、僕の田舎の新聞で見ると、お醫者の家へモルヒネを取りに入つた強盗がある。無論、僕のやうな貧乏人で、モヒ中毒にかかつてる奴さ。（懷中から醫者の證明書を取り出しながら）君、もう我が世が出来ない。今朝から一回もやらずにゐるんだからな。……これを持つて行

けば、誰にでも賣つて呉れる。大急ぎで買はしてくれ……頼む、大急ぎで……

（一郎は順から受取つた證明書を持つて行く。其後で順は、室内をぐるぐる歩き廻つてゐたが、或る油繪の前で釘付けにされたやうに立ち停まる。やがて近くの寢椅子にごろりと横になり、矢張油繪から目をはなさずにゐる。）

一郎（入つて来て）苦しいかい？

順。うむ。口を利くのが苦しい位だ。

一郎。藥が来るまで然うして黙つてゐるさ。

順。（さきほどから口をはなさずにゐる油繪の方へ指しながら）あれは何だ？ どうしたんだ？

一郎。この畫か？

順。然うだ、其後光のさした女の畫よ。誰が描いたんだい？

一郎。（苦笑しながら）悪口を言ふのなら、成るべく直截に願ひたいね。

順。君が描いたのか？ え？ 本當に君が描いたのかい？

一郎。もう、止せよ。僕自身、可い加減にしようてゐるんだ。此上もう、手傳つて貰ふこともあるまいからな。

順。（起つて、再び畫の前へ行く）ふむ……素敵だ……ふむ……

一郎。（寢椅子の横から凭り掛りながら）僕自身でも、こんな畫を描くやうになつちや駄目だといふことは十分に知つてゐる。全く駄目だ。君は二三年前から、なんにも描けなくなつてしまつたのだが、その方がまだしもだと思ふよ。こんな變癡奇倫な物を、變癡奇倫だと知りながら、矢張描かずにゐられないと云ふのは、なんにも描けなく成つてしまつたより、ずつと悪い事のやうだね。

順。（突如、一郎の兩手をつかむ）君と僕との間に、今更下らない譚話なんかいらぬ答だ。君は本當に然う思つてゐるのか？（問）君はこれがどれだけ立派な作品であるか、知らないのか？ 君がこれ送インクで書き綴見て描いた物みんなを集めても、この畫の十分の一をも値しないことを知らないのか？ 解らないのか？

一郎。（驚いて）君は眞面目だね？

順。まあ、聽きたまへ——此畫の中の女の頭を飾る圓光は、藝術家としての君の、辰巳一郎の一生を飾つてゐる。それを解らないでゐる君の生活の表皮こそまるつきり成つてゐな

いのだが、それにも係はらず、それだけの不可思議の世界へ突き入ることの出来た、君の生活の底を流れてゐる流れは、全然本物になりきつてゐる……ああ、僕もたつた一つで可い、これ位の物が描けてゐたなら？　これ位の物が描けるところまで来てゐたなら？

一郎。滅多に人を褒めない君が、然うまで言つて呉れるのは嬉しいよ。

順。僕はまだ褒め足りない。

一郎。だがね。本當の事を言ふと、僕は近頃いよいよ行詰まつてしまつたのだ。それは、絶望しても諦めのつかない、氣毒な藝術家が描いたんだ。自暴自棄になつた刷毛と、精神の錯亂した繪具とが、僕の監視から抜け出して行つて、夢遊病者のやうな足跡をあの畫布の上に残したのだ。それがあの氣遣ひ染みだ畫になつたのさ。

順。だから、立派な物が出来たのだ。殆んど君自身を超越してゐる——

一郎。然うだ。君は昔から、狂人か犯罪者かではなくちや超人になれないといふやうな、ツアラトウストラの哲學を信仰してゐたんだね。

順。あの哲學の、少くともあの部分だけは今でも信仰してゐる。兎に角此畫は……(と言ひ

掛けたところへ、老婢がモルヒネの壺を持つて戸口へ現れる。順は飛びかかるやうにしてそれを受取る) 有難う。どうも有難う。(寝椅子へ歸り、袂から注射器などを取り出して) ぢや、一寸失敬する。

一郎。(順の注射するところを見ながら) 君の哲學から云ふと、モヒ中毒になるなんぞも、何かの役に立ちさうだね。

順。それや立つとも。僕は此中毒の爲めに、前に描けてゐた畫が描けなくなつた代りに、これまでに見えなかつた物が見えるやうになつて來た。

一郎。半分は負惜みだらう。

順。だが、半分は本音だよ。君の此畫なんか、僕が斯うしてモヒ代を強請に來ないでゐると、どんな披ひを受けてしまつたか知れたものぢやない。

一郎。(微笑しながら) どうも有難う。然う云ふ注射はモヒ以上に利からな。お蔭様で近頃になく元氣が出て來た。それに今日は(と言ひながら、思ひ出したやうに窓からのぞいて見る)……僕達の一件の、はじめての誕生日でね——歌津子とあなつてから丁度一年目の。

順。(注射の道具を始末しながら) 然うか。それや濟まなかつたねえ。

一郎。なあに。他の奴等とちがつて君だもの。もうそろそろやつて來る頃なんだが、來たつても別に差支はないよ。

順。こつちで少々ばかり差支へる位のものかね。いづれにしても、君達の戀愛中毒も、だんだんと注射の分量が多くなつて來たらうな？

一郎。うむ。矢張、君の所謂意志薄弱でね。衛生に害あることは百も承知でゐながら、ついつい何時の間にか此處まで來てしまつたよ。此頃ちやもう注射の分量を減らさうと云ふ氣にさへもなれない位でね。

順。たしか、軍人だつたね？　あの人の結婚させられる相手と云ふのは。

一郎。陸軍の中尉で、滿洲の方に行つてゐるんださうだ。僕がああの人と知り合つた時には、もうこつちにはゐなかつたんだ。

順。それで、其結婚はつまりどう成るんだい？　一郎。僕には分らない。兎に角、もう少し勉強しなければいけないとか何とか言つて、一日送りにしてゐるんださうだ。

順。結局自由行動を取るだけの蠻男もなしか、

一郎。困る事には、あれの母がな、い、仲でね——君も知つてゐる通り。しかも其間が模範的に、圓滿に美しく行つてゐるんでね——

順。うむ。それは有名なものだ。どちらも善くやつてゐると思ふよ。

一郎。それから、あの腹異ひの弟とだつて、それや不思議に思はれる位、美しい關係になつてゐるんでね。

順。それで——それでどうして困る？

一郎。あれが自分の我儘を通して、亡父の取り極めて置いた婚約を反古にしてだね、繼母の甥に當る其軍人との結婚をやめにしてしまふとなると——折角の然うした美しい關係が滅茶滅茶になつてしまふ。それがどうにも堪へ切れないと言ふんだ。

順。ふむ。

一郎。生みの母でないだけに、なにしろなさね仲だからと、然う片附けられてしまふのが、あの婦人にとつて何よりも辛いと言ふんだ。

順。ふむ。成程ね。(微笑しながら) 僕の處の女房のやうな「新しい女」に云はせると、つまり「古い女」に屬してゐるんだね。まだ、『自己』と云ふ奴をしてゐないんだね。

一郎。(同じく微笑しながら) まあ、然うだ。

順。しかし、唯だ『自覺』をしてゐないだけぢやなさうだね。ああ云つた個性は——いや類型として見ても可い——君はイブセンのヘツダがどうして自殺するまでになつて來たと思ふ？

一郎。ヘツダと歌津子との間に、何かの關係でもあるのかい？

順。いや、止さう、僕にも何を言ふつもりだつたか分らなくなつた。兎に角一日送りにしてゐるなどは厄介だ。どうだい、注射の藥がだんだん高くなつて行くだらうね。

一郎。もう、可なり持てあましてゐる。順。其内面倒な大戦亂でも始まつて、君達の注射液も何のモルヒネ位に暴騰すれば、其時は僕の處へ藥代を借りに來るさ。

一郎。いや、悪くするとそんな事になるかも知れない。

順。これで僕のモヒ中毒も、何時かも話したやうに原因を絶せば戀愛なんだから可笑しい型の如く失戀して、型の如く學校をしくじつて、型の如く放蕩をしてさ、それからもう一つ型の如く體を壊してね、ちよくちよくモルヒネを用ひ出したと云ふのが、そもそも僕の今日ある所以なのだからな。

一郎。でも、モヒ中毒になつた頃には、戀愛中毒の方は治つたのだね。

順。僕の場合は戀愛中毒が急性だつたからな。はいかみたに一回眼で免疫さ。

一郎。はいかよりは重かつたらう。どつかに其痕が残つてゐさうなもの。

順。成程残るには残つたが、僕の顔や心臓には残らないで、その後の醜い結婚生活に大きく残つたよ。

一郎。(又もや起つて窓際へ行く) だが、君は君の家庭について、格別の不満もなさうぢやないか——寧ろ、無き過ぎる位に。

順。それや不満も無いさ。僕が作らうと思つて作つた家庭ぢやないからな。僕はもう、戀をするのも、結婚をするのも何をしてもいいやになつてゐたんだ。そして唯だあの女の言ふなりになつてやつたばかりだ。つまり、あの女から逃げ出すと云ふことさへも億劫だつたんだね。(思ひ出したやうに起ち上つて、そろそろと歩き出す)……うむ、だいが氣分が善くなつたぞ。灯の點く頃までは、先づあたり前の人間でゐられるな。(モルヒネの壺をすかして見ながら) これ丈ければ、先づ今月一杯は大丈夫だ。全く好い氣持だよ。

一郎。いつも其氣持なら、君も仕事が出来たらうね。

順。いや、仕事なんぞしくつても好い位に好い氣持だよ。

一郎（笑つて）それぢや、仕様がな。

順。だが戀愛なんかも同じだぜ。うまく行つてゐなければ、勿論仕事が出来ない。うまく行つてれば行つてゐるで、同じやうに仕事が出来ない。仕事なんぞしようと思つたら、面白可笑しい目に、遭はないで済ますだけの覺悟がある。もつとも本當の仕事は、（と言ひながら、モルヒネの壺をピアノの上に置き、例の圓光をかざした女の畫の方へ近づく。暫く無言）……矢張好いなあ。これだけは君を羨ましいと思ふよ。

一郎。またかい？ 褒めてくれるのだから悪くはないが。

順。（頭をかしげて）ねえ、君。これは誰かに似てるぜ——誰か僕達二人とも知つてゐる人。

一郎。さあ、誰に似てるかしら。僕には分らないなあ。

順。一々の輪郭でなしに、人種をも、時代をも、性別をさへも超越してしまひさうなあの顔全

體の、強い、蠱惑的な印象に、僕はたしかに見覚えがある。

一郎（笑ひながら）お互にそんな素張らしい女を、さうさう幾人も見たことはあるまいぜ。

（此時裏木戸の開く音。一郎強ひて落ちつかうと努力しながら、外廊への出口の方へ歩み寄る。）

來たかな——其繪の中の女より、少しばかりましな印象を與へてくれる人間が！（戸口から頭を出して見て、暫く無言）……いらつしやい。

仲子。（外廊から）今村は來てゐませんか？

一郎。まあ、御入んなさい。（順の方へふり向いて）仲子さんだつた。

順。また追駈けて來あがつたな。

仲子。（入る）きつと此方だと思つたら、矢張然うだつたわ。

一郎。さあ、御掛けなさい。暫く——

仲子。どうも失禮ばつかし。（順の方へ向いて）あれから直ぐに？

順。うむ。

仲子。また厚かましい事を御願ひしたでせう？（順、わざとらしく欠をして返事をせず。）

したでせう？ きつと。

順。ああ。お蔭様で此月一杯の兵糧は出來たよ。

仲子。それで又、大船に乗つた氣で、なまけてゐられると云ふんですね？

一郎。仲子さん、腰を掛けたらどうです？

仲子。有難う。頂きます。（順へ）貴方の兵糧は御蔭様で出來ても、私達の兵糧はどうなるんです？

あの子は……あの子は私一人の子で、貴方の子でないと仰しやるにしても、私は、私は一體どうして生活するんです？

順。俺には分らないですつて？

順。さうだ。俺がそんな事を考へなくなつてから久しいものぢやないか。お前と一緒にやつたそもそもから、俺はどうしてお前に生活させてやるかと云ふことなんぞ考へたことがない。

お前は『職業婦人』だものなあ——さうだ、個性の尊嚴を自覺した、解放された、獨立の、自由の、新しい——

仲子。また始まりましたね。

順。お前が始めるからさ。

仲子。じやうだんは措いて、私の生活をどうして下さるかは別として、貴方は第一、御自分の食へて行くことさへも考へないぢやありませんか？

ませんか。

順。だから、お前が考へてくれるのさ。

仲子。それを貴方は恥ぢませんか？

順。恥ぢるならば、それよりも先に恥ぢることがあるやうだ。

仲子。それよりも先に恥ぢること？ 何です、それは？

順。さあ、なんだか判然は俺にも分らん。

仲子。判然は分らないんですつて？

順。(今度は本當に欠をする) さうだ。分らん。

仲子。(獨語のやうに) あああ、いやになつちまふ。(半ば一郎へ、半ば順へ) 私も全く遣り切れないんですからねえ。

順。また愛想が盡きるだらう？

仲子。愛想も盡きるわ。

順。ちや、又別れるかな。

仲子。貴方は直ぐにそんな事を云ふ。

順。もうそろそろ出る頃だと思つて、一寸先きを越して見たばかりだ。俺よりもお前だよ——直ぐに別話を持ち出して、直ぐに又一緒にならうと言ひ出すのは。

仲子。貴方はどうして然う——結婚といふ事に對して、どうして然う不眞面目でせう？

順。お前も俺位に不眞面目だと、斯う頻繁に別

れたり一緒になつたりしないので済むんだがなあ。

仲子。(嘆息して) 本當に、あきれてしまふ。

順。よく飽きないであきれななあ。(笑ふ)

一郎。(同じく笑ひながら) 夫婦喧嘩も其程度に天下泰平な奴は家へ歸つてからゆつくりやる方がいいやうだ。

順。(思ひ出したやうに仲子へ) うむ。今日は辰巳君達の記念日で、もうそろそろ歌津子さんも来るんださうだ。俺達のこの序曲も、い

い加減にして切り上げようぜ。

仲子。然う。歌津子さんもいらつしやるんですか。會つて行きたいやうな氣もするわ。

順。あんまり大きなお尻を据ゑるなよ。別に用事もあるまい——今日に限つて？

仲子。無い事も無いわ。少しお願ひしたい事が。

順。お願ひしたい事か。それなら歌津子さんを待つまでもあるまい。辰巳君に解決して貰つても同じ事だ。

仲子。そんなお願ひぢやありませんよ。

順。へえ？ ちや、お前は此處へ何しに來たんだ？ 何の爲めにあんなに息を切らして、俺の跡を追駈けて來たんだ？

仲子。(少し狼狽しながら) 貴方が何時も何時も厚かましい事をお願ひしに來るのを、私として打つ捨て置けないからですわ。

順。辰巳君、どうだい。女と云ふ奴は斯う云ふ場合に臨んでも、まだ斯う云ふ往生際の悪いごまかしを言はうとするからねえ。全く敵はないよ。(仲子に向ひ) おい、手輕に本當の事を言つちまへ——もうそろそろ借りに來よう

と楽しみにしてゐた處へ、この俺が先きを越して飛び込んだので、大に面喰つたのだと云ふことをよ。そして俺がまだ強請らないでゐるやうだつたら、早速お前のお願ひを持ち出さうと云ふわけだつたらう。

一郎。(順の口を押えるやうにしながら) もう可い。分量が過ぎると面白くない。(仲子に) 此前の位で間に合いますか？ 然う、それちや明日の朝お届けしませう。

順。どうだい。俺のお蔭だぜ。俺にも禮を言へよ。

仲子。(順の言葉に頓着せず、一郎に) 本當に済みませんねえ——私までが、あんまり度々

の事で。

順。(起ち上る) まづ、これで用事は片付いたと。一刻も早く引上げる事にしようよ。

仲子。少しきまりが悪いが、悪いぢやありませんか。

順。きまりが悪い？ それはお前の身勝手だ。とかく他様の御都合を後廻しにするのは、一體に女共の善くない癖だぜ。

仲子。はい、はい。それぢや——色々とうも。

歌津子さんに宜しく。

一郎。それぢや、今日は失禮します。

順。大變に失禮したね。此次ぎに来てお詫びをしよう——お願ひと一緒にね。(笑ふ。既

帽子をかぶつて行きかけたが、その儘例の畫の處へ引返して来る) 然うだ。もう一度これを見て行かなくちや。(問) これだけの物を

描いてゐて、其價值が描いた人間自身に解らないと云ふんだからなあ。

一郎。またやつてる。僕にも追々にはそれが解つて行くだらうよ。(仲子に) 貴女のお服物

もこつちへ廻したやうです。

順。君、玄關の處には矢張あの犬がゐるだらうね。さつきは好い鹽梅に眠てゐたが。

一郎。さうだ。兩人とも大嫌ひだつたね。

順。(大袈裟に頭をかきながら) なあに、僕達

は別に犬嫌ひでもないが、犬の方が僕達のやうな様子をした人間を嫌ひでね。

一郎。ぢや、門の處まで送つて行かうよ。

(三人とも出て行つてしまふ。しばらくして、正面の玻璃窓へ外側からぼんと護

謨毯を投げ付けた者がゐる。やがて外廊の上にたがたが靴音が響く。)

歌津子。(靴音を追駈けるやうに) 貞雄さん、い

けませんねえ——そんなに亂暴しては。

貞雄。(外廊から扉を開けて飛び込む) 馬鹿に

静かだと思つたら、だあれもゐないんだね。

歌津子。(入る) まあ、ひどい煙だこと。直ぐに

いらつしやるわ、きつと。

貞雄。僕はこのテエブルの下へもぐり込んでや

らうかしら。辰巳さんが喫驚するから。(問)

姉さん、何を見るの？ (姉の立つてゐる、

例の圓光の畫の前へ行き、姉の手につかまる)

妙な畫だねえ、頭の處に圓い環なんかくつ着

けて、昔の古い畫みたいぢやないか。

歌津子。でも善い畫ですよ。この後光が本當に

よく調和してゐて、何だか斯う自然と頭が下

るやうだわ。

貞雄。少し、自家のみつるさんに似てるねえ——

みつるさんに。

歌津子。さう？ どんな處が？

貞雄。どんな處つて——何だか似てるんだも

の。(問) 姉さん、そんな處へかけて、ピア

ノを弾くのかい？

歌津子。さうぢやないけども、此處にかけてる

とあの畫がよく見えるから。もつと見てゐた

いの。(と言ひながら、凭りかかるやうに、ピ

アノの蓋へ手をやつた時、置き忘れられたモ

ルヒネの壁に觸れる) おや、何でせう？

貞雄。(姉の手から取り上げて、覺束なき拾ひ讀

みをする) モールーヒー、モルヒネつて——

藥だらう？

歌津子。モルヒネですつて？ (彈かれたものの

やうに起ち上る) まあ、どうしたんでせう、

そんな物！ (問) こつちへお出しなさい。恐ろ

しい藥ですからね。

(貞雄も氣味惡げに渡す。歌津子、受取り

て自分の袂に入れる)

貞雄。そんな物家へ持つて歸つて、矢張危いぢ

やないか！

(此時辰巳一郎、入つて来る。)

ああ辰巳さん、姉さんは袂に入れましたよ。

一郎。いらつしやい。姉さんが袂をどうしたん

ですつて？

歌津子。大變にお待たせして済みませんでした。

(壺を袂から出したが) ここに斯様な

一郎。ああ、それですか。今日の一年祭は其モルヒネの騒ぎで、さんざんな目に遭ひましたよ。今村が来て、今村の細君が追駈けて来て、少し面白過ぎる位な幕を出したものですからね。

歌津子。ああ然う。今村さんですか。まあ可かつた。

(一郎も、歌津子もかける。貞雄ひとり何かと什器をいぢり廻してゐる。)

一郎。兎に角私の方は、今日の前曲はすつかり失敗だつた。

歌津子。(貞雄の方を見ながら) 私の方もおなじよ。それに、前曲だけで済むかどうか……

一郎。(これも貞雄の方を氣にしながら) 何かあつたのですか。——善くない事が?

歌津子。貞雄さん。貴方ねえ、ジアイアントでも連れて、原場の方へ遊びに行つて来ないこと?

貞雄。姉さんが頼むつて言へば、行つて上げてもいい。

歌津子。(貞雄に近寄りながら) 頼むわ。斯うして手を合はしてお願ひするわ。

貞雄。ぢや、今度の日曜の、お伽芝居は大丈夫

ね?

一郎。貞雄さんもなかなか辣腕家だなあ。

歌津子。大丈夫、お伽芝居の方を引き受けましたから、さ、行つたらつしやい。

貞雄。よし。(玄關へ通ずる出口に近く立ちながら) だが、ジアイアントの奴、辰巳さんが出て見てくれなくつても、僕の言ふことを聴くかしら?

一郎。聴くとも。その心配はいらないよ。

(貞雄はたばたと駆け出して行く。)

歌津子。今日は本當に済みませんでした。大變におそくなつて。

一郎。お詫びはもう先刻済みしました。

歌津子。だけど。(間) 今日では生憎なんです。出掛けに、今晚はもしかしたら、少しおそくなるかも知れないと、母に然う言つたんですわ——これまでに、母に然う言ひ置いたやうにね。すると母が妙に改つた調子で言ふんですよ——實は二三日前から、どう云ふわけ

ともなく言ひそびれてゐたが、満洲の軍人さんが今度東京へ歸つて来る。もう船の中にある今日明日にも着かないものでない。ですから、成るべくならば、あまりおそくならない内に歸つていらつしやいつてね。それが、

あの母の物優しい調子で、私の氣持を悪くさせまいと、遠慮をいいいい言ふんでせう。

一郎。それで貴女は、出掛けることを見合はしたんだね。

歌津子。ええ。そして又出掛けることにするまでには、かれこれ一時間ばかりも経ちましたわ——私の母のやうな善い母と、私の辰巳さんのやうないけなない辰巳さんを持たない限り、どんな方にも経験することの出来ないやうな苦しい一時間が!

一郎。私がそんなにいけないかしら?——そんなに?

歌津子。いけないわ。

一郎。どうして?

歌津子。だつて貴方は——私が母の事も、亡くなつた父の取り極め話も、可愛い弟の事も、何もかもみんな忘れてしまへるほど、貴方は私を……

一郎。愛しないつて言ふの? 私の愛しやうが足りない?

歌津子。ええ。

一郎。だつて、貴女は始終恐れてゐたぢやないか——どのみち諦めに終らなくちやならない戀の相手が、あんまり度を越して熱して來は

しないかと！

歌津子。それも然うでしたわねえ。

(二人とも暫く無言。)

一郎。私は勿論、貴女の恐れてゐるゐないに係はらず、自分でも度を越して熱したかつた。貴女にも世間の義理人情をさへ忘れさせてしまひたかつた。

歌津子。私自身も忘れてしまひたかつたわ。

忘れるのを恐れてゐる癖にね。(間) つまり駄目ですのねえ——こんな煮え切らない、臆病な、不徹底な人間は。

一郎。だけど、その臆病と不徹底とが、充實の足りない私の心を鎮静したのかも分らない。

歌津子。それなら、貴方も矢張り私と同じやうに駄目ですのねえ。

(前よりも長き沈黙。)

一郎。(落日を見ようとしてもしたかの如く、起ちて窓際に近づく) 愈々總勘定をする處へ来たやうですね。此記念日が二人で祝ふ、最初の、そして最終の記念日ですね。

歌津子。(ピアノの前へ来てかける) 然うでせうか？ もう此上は、どうにもならないものでせうか？

一郎。それは貴女の方が私よりも善く知つてゐる筈だ。(間) いや、解り切つた話を、わざわざ問題にするのはよさう。何か一つ弾いてくれませんか？ 此場合にふさはしいやうなものをごへか。

歌津子。貴方も御一緒に歌つて頂けるやうなもの？

一郎。いや、斯う云ふ場合は器樂だけでなくちや。

(歌津子、ピアノを弾く。センチメンタルに華やかな一曲を弾き終る。暫くの間二人とも無言。室内漸く暗し。)

歌津子。貴方、覺えていらつしやる——今のを？

一郎。うむ。貴女があれを弾いた時の事は忘れないね。私はあの時、斯うして貴女の背に立つてゐて、白い頸脚の微かに震へるのを見ながら聞いてゐた。あの時、貴女を色々に想像して見たことをも判然と覺えてゐる。そのあとで、初めて本當に貴女を見たのだから。

歌津子。雨が降つてゐましたのね——仲子さんが歸つて行つて二人つきりになつた時。

一郎。貴女が雨を御好きだと云ふことは、あの時から知つた。

歌津子。自分の話した事なんか、なんにも覺えてないわ。ただ、御話を伺つてると、それが庭の若葉にふり注いでゐる、柔い雨の音と一つになつて、胸の中へしみ込んで行つたのを……

一郎。ねえ、どうしよう？ 今日的一年祭には、あの静かな私達二人の「郷里」へ行つて、丁度あの晩したやうに、貴女のあの甘い飲物にお附合ひをする筈になつてゐたのだから。

歌津子。さうね——兎に角貞雄さんが歸つて来てから。

一郎。もう一つ何か弾いて呉れませんか？ 今度は、過ぎ去つた事を思ひ出させるのでなくて、これからさきを考へさせるやうなものを。

歌津子。駄目よ、そんなむづかしい事を言つて……とにかく弾いて見るわ。

(歌津子、しばらくありて、ゆるやかにペグスの流れのやうな一曲を弾きはじめる。曲半ばにしてはたと弾き止む。)

一郎。どうしたの？ どうして止したんだ？

歌津子。(ふり返つて) あの畫の事を思ひ出したの？ あの後光のさした女の姿をふと思ひ出したんです。

一郎。そして？

歌津子。そして、自然に指端が動かなくなつち

やつたの。

(一郎、首をかしげて沈黙。)

貴方が御描きになつて？

一郎。ええ。

歌津子。甚の事なんか解らないけども、これまでに御描きになつた物の中でも、一等善い畫だと思ふわ。

一郎。さうかなあ。口の悪い今村も、先刻しきりに褒めた行つた。妙だなあ。

歌津子。あれは頂けないこと？

一郎。それや差上げてでもいいが……(間)この最初の、最終の記念日を記念する物としてですね？

歌津子。さう仰しやると、何だか悲しくなつて来るわ。

(歌津子、何物かにもたれ、一郎と見物とどちらへも顔をそむけて立つ。)

ねえ、貴方。これから先き、お互にどうなつても……

一郎。お互にどうなつても？

歌津子。せめて妹と思つて……兄妹の關係でも……

一郎。それだけは勘辨して下さい。

歌津子。どうして？ 兄妹のやうに綺麗な關

係になつて、綺麗な心持で附き合つて行くのが、どうしていけないでせう？

一郎。それは小説か芝居の中の話です。少くとも、私には到底堪へられない事だから。

歌津子。然うでせうか。

一郎。然うです。私はいつそ、お互にお友達にもならなかつた時分、あの時分の關係になつてしまひたい。

歌津子。(一郎を直視しながら)と仰しやるのは？

一郎。『もとの他人』になつてしまふのが、まだしも樂だと云ふんです。

歌津子。(駆け寄つて、一郎の手を捕へる)貴方、怒つたの？ 御氣に障つたの？ それちや困るわ。

(一郎、無言の儘靜に歌津子の手を拂ひ、近くの椅子にかけさせる。)

一郎。ちつとも怒つてやしない。怒る理由がないもの。

歌津子。だけど、酷いわ。『もとの他人』になつてしまふつて仰しやるんだもの。

一郎。それぢや、『もとの他人』と言ふ言葉だけは取り消してもいい。だけど事實は、ただのお友達になつてしまふと云ふやうな器用な藝

當が、果して私に出来るかどうか。

歌津子。然うでせうか。然うでせうかねえ。

(太息を漏らす。二人とも暫く無言。)

一郎。歌津子さん、貴女の前だけれど、少くとも男子の場合は、いや、僕のやうな男の場合にはね、新しい物が舊い物の代りになると云ふのは、そんなにお手輕な事ぢやないんだから！

歌津子。一郎さん！ 斯う云つて貴方の名を呼ぶやうになつたのもやつと近頃の事なのね！

いいわ！ 私もう、どうなつても構はないと思ふわ！ 貴方がそんな事を仰しやると、私はもう……堪忍して下さいな！ 本當に私が惡かつたから！

一郎。貴女だけが悪いんぢやない。私は、貴女を咎めるよりも、私自身を責めてゐる？

(二人とも沈黙。)

蛙が頻りに啼いてますね。

歌津子。どうしてあんなに啼くでせう？ 何だか堪らないわ！——あんなに蛙がいないてる。

(二人とも沈黙。貞雄、裏から歸つて来る。)

貞雄。こら、ジャイアント！ お前はここに

となしくしてゐるんだよ。いいかい？

(室内へ飛び込む。)

暗いなあ。どうしたの？——電氣もつけないで。

(靴の盥椅子の上に飛び上つて、電燈のスイッチをひねる。)

なあんだ。可笑しいぢやないか——大人が泣いたりなんかして！

(幕)

第二幕

(第一幕より五六ヶ月の後。市内、歌津の家の一部分。右手寄りに満洒たる日本風の室。左、纖巧に陥らざる程度のクラシックな庭園に、椅子ベンチの用をなすやうな物いくつかを置く。十月頃の午前にはふさはしき鳥の聲。みつる、縁側の日常り善きところにて編物をしてゐる。)

繼母。(襖をあけて入つて來ながら) 歌津子さん、歌津子さん！ おや、みつるさんなの。

歌津子さんはどうしたかしら。

みつる。(顔をあげて) 先刻まで、其邊にゐまし

たよ。喚んで來ませうか？

繼母。いいえ、それにも及ばない事ですがね。

(間) みつる、さんは、お風邪はもういい？ しばりしたの？

みつる。さ、しばりもしないけど。

繼母。もつと臥んでいらつしやればいいに。

みつる。だつて私の風邪は、綺麗に治るつてことはないんですもの。

繼母。だから一層氣を附けることですよ。(編物を近づいて見ながら) おや、もうお仕事なの？

みつる。お仕事と云ふほどのものぢやないわ。(編み続ける。)

繼母。貴女は始終何かにかかしてゐるのね。

みつる。駄目ですよ。こんなに意氣地がないんですもの。

繼母。兄さんの靴足袋？ も少しですわ。

みつる。ええ。もう少しの利いた物拵へて上げるともりだつたんだけども——御祝に。

繼母。そんな事言つて呉れる貴女が、貴女が歌津子さんだつたらねえ！ そしたらどんなに嬉しいでせう！ (言葉をきり、徐に品よく四邊を見廻したる後再び續ける) それはねえ、

他の點ではなんにも云ふ事はないんです。歌

津子さんも、なかなか善く出來てゐる人ですからね。あんな新しい教育を受けた新しい人に、よくあまで出來ることだと、全く然う思ふこともありすよ。ただね、忠夫さんと一緒にいる話だけはどうしたものか……

それとも、一緒にいるのが嫌だつて言つたことはないんだけれど、いよいよとなると何時でも、もう少し、もう少しで結婚を延ばすんだもの。

貞雄。(植込の奥から飛び出して來る) 忠夫さんは未だ？ 未だ來ない？

みつる。ええ、未だなの。

貞雄。今日は大尉になつて來るんだねえ。早く來ないかなあ。來たら、直ぐに知らして頂戴、みつるさん。僕はそれまで、爆弾投下をやつてから。いいかい？

みつる。よござんすとも。

繼母。塀の上なんぞへ上つちやいけませんよ。(貞雄は耳にも入れず駆け出して行く。)

忠夫さんも今度また大尉になつたし、然う然う何時までもねえ。此五月にあつちから歸つて來た時、どうしても濟まなくちやいけな

いのを、矢張延ばしてあるんだから。(間) だけど、みつる、さんは如何思ひます？

みつる。何をですか？（細物の手を休める。）
繼母。歌津子さんは、結局どうするつもりでせうね。（間）結婚はしてくれないでせうか？

みつる。まさか、そんな事——
繼母。そんな事あるまいって貴女は言ふの？

みつる。ええ。
繼母。だけど、忠夫さんに對して何だか他處他處しくしてゐると思はない？

みつる。形の上でするだけの事はしてゐても、何だか冷たい處があるやうに思はない？ 近頃になつてだんだんと。

みつる。そんな事、私なんかには分りませんわ。
繼母。それにあの陽氣な、賑かな人が、折々妙に陰氣になつてでせう。ね？

みつる。然う仰しやれば然うね。
繼母。私もねえ、歌津子さんが本當にいやなものを無理押付にするんぢや悪いと思つてねえ。（間）それに就いて、みつるさんは何か思ひ當るやうな事はない？

みつる。思ひ當るつて、どんな？
繼母。歌津子さんに限つて、別に間違ひなんぞあるわけないでせうけれど、何かね、忠夫さん處へ行きたくなるやうな事でも、あ

るんぢやないかと思つて。何か貴女に氣の付いてるやうな事はない？
みつる。そんな事、あるものですか。それに私なんぞ、歌津子さんの前ぢや全然の子供なんですもの。

歌津子。（左側より庭園へ入つて来る様子。未だ其姿見えす。）あちらへ行きますせうよ。貴方がたも寒がりだから。ええ、構ひませんとも。
繼母。忠夫さんかしら？ お連れがあるやうですわ。きつと。

みつる。兄さんぢやなさうよ。きつと他の方ですわ。きつと。
繼母。（みつるが逃げ出しさうにしてゐるのを怪んで）あ、どうしたの？——そんな様子をして！

（歌津子、一郎順の二人をつれて飛石傳ひに来る。）
歌津子。珍らしいお客様ですよ。みんなで、日向ぼっこしようと思つて、こちらへお連れして來ましたわ。

繼母。おや、いらつしやいまし。辰巳さん、随分お久し振りでございますねえ。
一郎。大變に御無沙汰しました。みつるさん、

暫く。
（みつる、黙讀して伯母の背へかくれる。順は既に縁側にかけてゐる、黙つて人々の顔を見比べてゐる。）

繼母。今日は丁度、みつるの兄の忠夫といふのも參る筈になつて居ります。全く善い處へいらして頂きました。（みつるや歌津子に向ひ）少し片付けませうよ。

鳥が鳴いてゐるな。（目を擧げて）何か赤い實のなる樹が一二本欲しいぢやないか。
一郎。俳句でもひねりさうな事を言ふねえ。どうだい、好い氣持かい？

順。一件を（いつも注射するところへ指教へをしながら）やつた後は、全く極樂の世界だからね。
（其内に女等三人とも順次に出て行く）

だが、今日は驚いたぜ。君の方からわざわざ押にかけて來て、突如モルヒネの押賣をはじめるんだもの。
一郎。（微笑しながら）済みませんでした。どうか御勘辨を願ひます。

順。それや勘辨してもいいが、一體今日はどうしたんだい？
一郎。只今説明いたします。

順。早くして貰ひたいね。何處へ行くんだとも、何しに行くんだとも聞かれないで、黙々として素直に此處まで随行して來てゐるんだからな。

一郎。(ことさら唐突に) 僕は此春以來——會はないでゐたんだ。

順。會はないでゐた？ 今の——此處のね。

ふむ。

一郎。(順に近くかけて) 貰つた手紙に、(返事)も出さないでゐたんだ。

順。ふむ。一度もだね？

一郎。ああ、ただの一度も。

順。よく我慢したな。

一郎。然うだ。僕は我慢してゐたんだ。平氣でゐたわけぢやない。

順。それは然うだらう。

一郎。加之、僕の場合も御多分に漏れず、諦めようと思つてからが眞剣な物になつて來た。

順。ふむ。それで？——それで此僕がどんな役割を引受けるんだい？

一郎。然う急いぢや困る。

順。よし、よし。だが、兎に角諦めようと思つても諦められないと斯う云ふんだね？

一郎。然うだ。

順。それで、兎に角やつて來たと云ふんだらう？

一郎。いや。然う一足飛びに飛んぢやいけない。まだ其間にはひるものがある。(間)僕は、諦められないものを、どうしても、どんなにしても諦めなくちやいけないと思つたんだ。

順。ふむ。

一郎。そして近頃やつと其方法を考へつたんだよ。

順。それはどう云ふ方法なんだい？

一郎。一口に云ふと、あの人を『友人の細君』にしてみふんだ。

順。え？

一郎。いや、然う言つちやいけない——僕はあの人の良人の友人になつてしまふんだ。あの人の良人になるべき人の友人にさ。

順。ふむ。そして、其細君の友人であるより以上に、其良人の友人になつてしまはうと、斯う云ふんだね。

一郎。まあ、然うなんだ。あの人を、ただ僕の親友の細君に過ぎないものにしてしまはうと云ふんだ。

(順、腕組みをして考へる。)

一郎。君はそれを實行の出来ない事だと云ふのかい？ (間) それとも、非常な冒險でもあると云ふのかい？

順。少くとも今迄は、さう云ふ計畫に成功した奴はあんまりあるまいな。それに、あまり新しい思付きでもないやうに思ふよ。

一郎。僕はむしろ陳腐な思付きと見られても構はない——僕には、これよりほかに方法がつかなくなつたのだ。(間) 殆んどあらゆる物の權威を承認しなくなつてゐる僕の心にも、たつた一つ、神聖にして犯すべからざるものとして残つてゐるのは、友人同士の信任といふことだ。友人同士が互に信じ合ひ、許し合つてゐるといふことだ。ただ友情の義務といふものだけが、自由過ぎる僕をも束縛して呉れる。そして其束縛を、自ら進んで作らうと決心したんだ。

順。説明はそれでいい。だが、どうか不自然な物がある。無理がある。君は、その理窟が君自身へのごまかしになつてしまはないやうに、氣をつける必要があるな。

一郎。今の僕には、然う云ふ見方をされても、別に腹は立たないよ。

順。それで、兎に角、もう會つて見たのかい？

その——何とか言つたけな？

一郎。武田——「夫君と云ふのださうだ。實は今日これから會はうとしてゐるんだ。今日此處ではじめて其人に紹介してくれるんだ。」

順。さうか。それ。此僕が、甚だ光榮ある介添に選ばれたと云ふわけなのかい？

一郎。（苦笑しながら）まあ、然うだ。

順。なあ、程ね。

一郎。濟まないね。

順。それや可いが、少し眠くなつて來たやうだ。

注射に氣前を見せ過ぎたと見える。一寸失敬して、ごろりとやるかな。僕の用事が出來たら起してくれたまへ。

（順、肘枕で縁側に横になる。）

一郎。君の斯う云ふ御行儀も通り物になつたねえ。

（自分の外套を脱いでかけてやる。鳥の聲。更に折々、「萬歳！」と叫ぶ英雄の聲が遠くの方で聞える。一郎、煙草を銜へて庭園の中をぶらついてゐる。）

歌津子。（何處からともなく一郎に近づいて）大變な御馳走が出來かかつてるんですよ。

一郎。（兩腕を組んだまま、右足の踵をあげて軽く地を踏みつけるやうにしながら）少し冒

険すぎたでせうか？

歌津子。冒険？

一郎。今日此處へ來たことがき。

歌津子。どうして？

一郎。武田——君は、本當に來るんですか？

歌津子。ええ。きつと來ます。

一郎。どうも冒険にすぎたと思ふ。

歌津子。そんな事ないわ。私は最初から然うして頂くつもりでしたもの。（間）貴方がたにお友達になつて頂いて、そして私は——

一郎。僕の妹になると云ふんでしたねえ。

歌津子。それを貴方は、あんなひどい事言ふんですもの。あれから後も、随分だつたわ。

一郎。貴女が會ひに來たのに、會はなかつたと云ふ事ですか？

歌津子。それば、つかいぢやないわ。いくら私から手紙を上げてても貴方は一遍も返事をくれませんでした。

一郎。（苦笑しながら）其言譯は、一昨日のあの手紙でした筈ですよ。

歌津子。私もお仕舞ひには口惜しくなつて、もう書くまい、これ限り書くまいと思つたんですけれど。

一郎。全く濟みません。

歌津子。それからまだ、色々あつたわ——言ひ度い事が。

一郎。序にみんな仰しやいよ。

歌津子。（手近の常磐木の手を指頭に弄ひながら）だけれど、もう可いの。

一郎。どうして？

歌津子。（俯いて）貴方がいらしたから。

一郎。貴女は、あれつきりもう會ふことがないやうに思つてゐたの？

歌津子。いいえ。なぜだか、然うは思へなかつたの。考へられなかつたの。

一郎。兎に角私は負けたんですね。貴女の最初に言ひ出した通りになつちまつて。

歌津子。だけれど、善い人ですよ——あの人も。

一郎。（微笑しながら）私だって、人間は悪くないつもりです。

歌津子。じやうだんでなく、正直で、親切で、軍人なんかには珍らしく、極く温厚しい人なんですすよ。

一郎。私の事も、それ位には褒めて置いてくれるでせうね。

歌津子。どうですか？これから先き貴方は、あの人のお友達にばかりし成つてしまつて、私なんかどうでもよくなつてしまふんださう

ですもの。

一郎。それで貴女も、私がどうなつてもいいと云ふわけですね？

歌津子。ええ、さうなの。(斯く言ひながら、一郎の肩にとまつてゐた枯葉をとつてやる) 今日も銃獵にいらつしやるところだつたの？

一郎。ええ。貴女からのあの手紙が來たとき、私はもう此服裝で、あの(指さしながら)銃をさげて玄關まで出掛けてゐたんです。それで、此儘來たんですよ。

歌津子。(今村の方を見ながら) 貴方がわざわざ御連れになつて？

(一郎黙つてうなづく。歌津子、二歩三歩今村の方へ歩き出す。)

本當に御眼みになつてゐるかしら？

(此時忽ちサアベルの、石の上に引き置られる音聞ゆ。歌津子、一郎ともに振り返つて見る。)

貞雄。(大きな軍服を着、軍帽に半ば顔をかくし、サアベルを引きずつて出て來る。舉手の禮) やあ、失敬！

歌津子。忠夫さんがいらしたの？

貞雄。ああ、今着物をきてゐる。

歌津子。あなた、そんな惡戯して忠夫さんに叱

られない？

貞雄。叱られるもんか。忠夫さんは僕が何をしても怒らないんだもの。此前來た時なんか、僕が騎兵になりたいつて言つたらね、僕の馬になつて、四つん這ひをしてくれたよ。

歌津子。(笑ひながら) 然う。それは見たかつたわ。

(二郎も共に笑つてゐるところへ、今度は本物の忠夫が、和服に庭下駄を突っかけながら出て來る。)

貞雄。忠夫さんが來たよ！

歌津子。(丁寧に迎へて) いらつしやいまし。

忠夫。(一郎に目禮しながら、歌津子へ) 御客様ださうだね。

歌津子。ええ。いつか御紹介しようつて話してゐた方の。辰巳さん——これは私達の從兄です。

忠夫。僕は武田忠夫。こんな失敬な風をして居ります。

一郎。僕は辰巳一郎。どうか御心易く。

忠夫。(今村の方へ一寸視線を走らしたあと) 御名前は豫てから伺つて居りましたし、よく展覽會や雑誌の上などで御作も拜見して居りました。

一郎。いや、どうも……

貞雄。辰巳さんはエライ文學者だし、畫が素敵にうまいんだつて。先達で描いた後光の畫なんか、それが大變な物なんだつて——(今村順を指さし) あの人が然う言つたよ。

歌津子。私も然う言つたでせう？

貞雄。姉さんなんか駄目だけれども、あの人にはえ、あれでなかなかエライんだつて——もとはエノイ人なんだつて。

一郎。(微笑しながら忠夫に) これは當人自身が言つたのかも知れません。僕の友人です——後程改めて御紹介させう。

忠夫。矢張美術の方ですね？

貞雄。此人は『モト』さんて云ふの。そして他處の家へ行つても、本當のお辭儀なんかちつともしないんだよ。

忠夫。本當のお辭儀は、此方も少々耳が痛いねえ。

歌津子。貞雄さん、あなた少し、母様やみつるさんの處へも行つてらつしやいな。

貞雄。いやだ。あつちへ行つてると、また姉さんの處へでも行つてらつしやいつて言ふから。

歌津子。それぢや、私も御一緒に行きましょ。

(歌津子、貞雄と共に去る。)

忠夫。 好い季節になつて來ましたねえ。

一郎。 全く體が引き緊つて來るやうです。

(斯う言ひながら、椅子にかけたまま右足の踵をあげて、輕く地を踏みつけるやうにする。忠夫は其癖に注意を拂ひながら、頭をかしげて暫く無言。一郎も無言。)

忠夫。 君には何處かで御目にかかつた事があるやうな氣がしますね。

一郎。 (記憶の中をさぐる様にしながら) 然うでせうか? (間) もつとも、僕は六七年前親類の家を繼いだので、もとは宮田と云つてゐました。

忠夫。 然うだ。それで分つた——君は野球をやつてゐたでせう?——中學時代に。

一郎。 ええ、あの頃は。

忠夫。 ぢや、同じ中學にゐたんです。そして僕は一年か二年下だつた。

一郎。 へえ! さうですか。君も協會中學にゐたんですか?

忠夫。 僕は宮田一郎といふ名前も覚えてゐるし、君があの頃の運動シャツを着て、あのグラウンドに突立つてゐたのも判然覚えてゐる。

僕は羨ましかつた。

一郎。 それぢや、君もあの教頭排斥の運動なんか知つてゐますね?

忠夫。 僕達も驢尾に附して大にやつた方ですよ。それから、あの隣原つばの草を焼いて、よく問題が起つたものですねえ。

一郎。 あの頃の話をしていると、何だか君の御顔にも、見覚えがあるやうな氣がして來る。今日はじめて會つたやうな氣がしない。

(歌津子、襖を開き、何かを運んで出る。)

歌津子。 何だか、御話が面白さうですね。

忠夫。 面白い答。 辰巳君と僕は、幾年前からの知合ひなんだもの。

一郎。 (歌津子に) おんなじ中學にゐたんださうですよ。

歌津子。 まあ。然う! (一郎の方をちらりと見て) それはよかつたわ。

忠夫。 歌津子さんの御紹介なんか本當はいらなかつたんだ。何なら僕から此人の當年の活動振りを素破抜いて上げてもいいよ。

一郎。 どうか御手柔らかに。こちらはまだ、なんにも素破抜きの出來るやうな材料を手に入れてゐないのだから。

歌津子。 忠夫さんの方にも随分とあるわ。お友

達とあいはんの食べつくらして病院へ入つた話だの、歌留多に負けて、お仕舞ひに泣き出した話だの——

忠夫。 (頭をかきながら) よく覚えてゐるんだなあ。

歌津子。 (笑ひながら) お生憎様ね。

(一郎も輕く笑ふ。)

忠夫。 今度は歌津子さんの番だ——(一郎に向ひ)一體、此人は、『新しい女』と云ふんですかねえ?

一郎。 『新しい女』ですか?

忠夫。 何かの雑誌の口繪でしたよ。『新しい女』と云ふ大勢の妙癡奇倫な女共の中に此人も寫つてゐるんです。

歌津子。 なんだか、あぶなくなつて來ましたのね。

(と云ひながら、席を立ちて、徐かに室を出て行く。)

忠夫。 矢張り『新しい女』と云ふんでせうか?

一郎。 君にはどう見えます?

忠夫。 僕達には別に——然う破壊的な考など有つてゐさうにも見えないんですがね。

一郎。 君は御嫌ひですが? 一體に『新しい女』といふものを。

忠夫。君は御好きですか、反問したい位ですな。なにしろどうも、貞操も、道徳も、宗教も、社會も、一切の物を無視してしまはうと云ふやうなんぢや。そして、男だか女だか分らないやうな化物になつてしまふんだから。

一郎。(微笑しながら) そんな風にでなくとも、新しくなれさうぢやありませんか。男が新しくなるのと同じやうに。

忠夫。男子は別です。これから先の男子は、頭が古くちや駄目ですからね。

一郎。それで、婦人だけはいつまでも頭を古くして置いて可いと云ふんですか？

忠夫。とにかく、男の方は自然に新しくなつて来るんですからね。新しくならないぢやあられないんですからね。けれども婦人は――

一郎。事情を異にしてゐると云ふんですか？

忠夫。さあ、然う云はれて見ると何ですが……

(間) 君はそれぢや、あの妙擬奇倫な男だか女だか分らないやうな『新しい女』を、嫌ひでないと云ふだけの勇氣がありますか？

一郎。少くとも、我慢しなくちやなりませんまいね――似て非な物がまぎれ込んだり、出来損ひの犠牲が出て來たりするからと云つて。

忠夫。むづかしい理窟は止めにして、君もまだ獨身ださうですね。

一郎。(一寸、忠夫の顔を見て) ええ、まだ。

忠夫。所謂『新しい女』と結婚するつもりですか？

一郎。(微笑しながら) 今度はからめてへ廻りましたね。

忠夫。どうです。あの雑誌の口絵に出てゐたやうな『新しい女』を、細君にするだけの酔興がありますか？

一郎。(右足の踵を舉げて、軽く地を踏みつけるやうにしながら) それに就いちや、亡くなつた大山さんが、おやまかちやんりんの大山公爵がうまい事を言ひましたよ。

忠夫。どんな事を言ひました？――大山元帥が。

一郎。豪傑と云ふ奴は、友達にして付き合つてると面白い物だが、親類にもつちややり、切れないつてね。

忠夫。なある程。

一郎。『新しい女』もまた然りで、こつちの身勝手手かも知れないが、當分の内はまあ、友達附合にだけして置いて貰ひたいやうですね。

忠夫。それぢや君も、舊い女を満更嫌ひでもな

いですね。

一郎。家庭を作る場合の相棒としてでも考へれば、むしろ大に好きですよ。

忠夫。何と云つても、純日本式の婦人は悪くありませんからね。

(歌津子、また出て來る。)

歌津子。結局私は新しい女になつたのですか、それとも舊い女になつたのですか？

忠夫。然うだ。其問題を片附けないで置いて、辰巳君が舊い女を御嫌ひでないと云ふやうな話まで來てしまつた。

歌津子。そんなお話なの。辰巳さんはいつでも然う仰しやるわ――舊い女の中の善いのは、新しい女の中の悪いのより、どれだけまし、か知れないつて。

忠夫。同感だね。

歌津子。それから――悪い過渡期の風にそまらな、純粹に舊式な日本婦人には、どんな歐羅巴の婦人にも無いやうな美しい所があるつて。

忠夫。ふむ。

一郎。その美しいと云ふ言葉は、『強い』といふ言葉と入れ換へにしても通用するんです。――日本の婦人は、太平無事の日常生活には、厭

羅バの婦人ほど面白くも重寶にも出来てゐない代り、まさかの場合には、有難男子をして顔色ならしめるほどの勇者になる。

忠夫。全く然うだ。大に我が意を得てゐる！

歌津子。(笑ひながら) すつかり、肝膽相照らしちやつたんですね。

忠夫。これならば、實際肝膽相照らすことが出来るよ。

(此時みつる、襖を開けて、歌津子を喚びさうにしてゐる。忠夫、先づそれに氣づく。)

(みつるの方を指さしながら) 歌津子さん、みつるが呼んでるよ。

歌津子。あら、然う。

(歌津子、立つてみつるの處へ行き、低聲に話をしてゐる。)

一郎。(起ちかけて) 今村の奴、もう起してやるかな。

忠夫。まあ、いいでせう——其儘にして置いて。

一郎。モルヒネの慢性中毒でしてね、注射のあと、どうかするとこれなんです。

忠夫。然うですか。(間)とにかくわきわき起さないでもいいでせう。

(其間、みつるの去り、歌津子も引き返して来る。)

(歌津子の引き返して來たのを見て) 此人の新しういへば未解決の儘として、君はどう思ひます？ あのみつるをどう思ひます？

一郎。どう思ふとは？

忠夫。舊い女の強ち嫌ひでもない君として、あの僕の妹をどう思ひます？

一郎。どう思ふと言つて、誠に好い妹さんですよ。然うです、僕が舊い女を嫌ひではないのは、みつるさんのやうな人がゐてくれるからです。實際僕にもみつるさんのやうな妹があつたらと思ひますね。

歌津子。妹さんにでなく、みつるさんみたいな人を奥さんに有つ方は、さぞ仕合せでせうね。

忠夫。僕は其人の方が、僕なんかより、ずつと仕合せだと思ふ——自分の妹の事ですけれど。

一郎。ああ、然う云ふ御話ですか？ 解りましたよ。(歌津子と目を見合せながら) だが、僕なんぞがみつるさんのやうな人を貰ふとしますね、世の中にみつるさん位お氣の毒な人はありますまいよ。

歌津子。(用事を思ひ出したやうに、起ち上つて襖の方へ行きながら) でも、少々位のお氣の毒なら我慢してお貰ひになりたありませんか？

一郎。だが、貰ひ度くるところへは、大抵は來たがらないもんですからね。

(此時歌津子、襖を開く。)

歌津子。まあ！ いやなみつるさん！ そんな處に立つてゐて。

みつる。だつて、入れないんですもの。

歌津子。貴女、さつきの面白い話を聞いて？

みつる。そんな事——知らないわ。

歌津子。あら？ さうして置いて行つちまふの？

(歌津子、みつるの置いて行つた物を、運ぶべき處へ運び入れ、やがて出て行く。その時忠夫と一郎とは既に次ぎの對話をはじめてゐる。)

忠夫。(自慢とも謙遜ともつかぬ調子にて) なにしる、あんな風ですからね。

一郎。(無意味に) 然うですねえ。

忠夫。ただ一殘念なのは、體が餘り丈夫でない事です。それだけがあれの疵です。

一郎。しかし、餘り丈夫過ぎるのも、女とし

てはどうですか。トルストイか誰かも言つてゐましたよ——一遍も病氣したことのない女なんぞ、考へて見ただけでも恐ろしいつてね。

忠夫。それやどうしても、自分が病身だと、自然優しくはなりませんね。——だが矢張、あまり弱くちやいけな。い。(一郎の服装を見、近くに置いてある銃を見ながら) 君は銃を御好きですか？

一郎。餘り中りはないですがね。まあ、弾を打つて見るのを樂み位なものですよ。

忠夫。(起つて一郎の獵銃を指さしながら) 一寸あれを拜見。

一郎。どうぞ。ほんの間に合せ物です。

(忠夫、銃を取りに行く。)

順。(震返りを打ちながら) よし、よし、分つた。

忠夫。(銃を持つてもとの席に歸り) 御目が覺めたと見えますね。

一郎。ななに。寢言です——今のは。

忠夫。然うですか。(それから熱心に銃を味する) ははあ。これは頗る新式のやうだな。なる程。

一郎。先度、少し亂暴しましてね。どうでも可

い處だけでも、一寸壊しましたよ。

忠夫。(へえ) 何處です——その、壊れてゐると云ふのは？

一郎。一寸拜借。

(斯う言ひながら、起つて銃を受取らうとした時、脚が椅子にからまつて、前のめりにのめる。その途端に銃がどんと鳴る。忠夫はうんと一聲、仰向けに倒れる。)

ああッ！

(と叫んで、一瞬間棒立ちになつたが、やがて正氣に返つて、忠夫のそばへ駈け寄らうとする。)

順。(銃聲に目を覺まし、周章へて一郎の背より組みつく) 止せよ！ つまらない！

一郎。(順を後へ突き飛ばし) 穿き違へるな。異ふぞ！

(一郎、みつる、繼母、順など、續々と忠夫の處に集まり、混雜を極めてゐた時、歌津子はよろよろと出て来て、途中にびたりと立ちどまる。)

歌津子。辰巳さん！ 辰巳さんが如何したのです？

みつる。(判然とした調子にて) 兄さんよ！ 兄

さんが大變ですよ！

歌津子。(駆け寄り、忠夫をのぞいて見て) まあ！ 御顔を！ こんな。こんな事になつてしまつて！ (みつるの手を取つて舞臺の正面へ引き出しながら) ねえ、みつるさん過失ですか？ え？ 過失だつたでせうか？ (幕)

第三幕

(第二幕より十ヶ月ばかりの後。山中の湖水に臨める一旅館、最上階の見晴らしよき一室。藤の寢椅子には、今は盲となれる忠夫が寝轉んでゐる。正面の欄干が何かにもたれて、妻の歌津子が立つてゐる。)

忠夫。(午睡より目覺めて) あ、ああ。好い氣持に睡てゐた。どれ位睡たかしら？

(歌津子には忠夫の言葉が聞えざるものゝ如し。)

歌津子！ るないのかい？

歌津子。(愕然として驚きたる如く) あら！ 御目覺めになつて？

忠夫。ああ。何か讀んででもゐたのかい？

歌津子。(狼狽して) ええ、先刻まで。

忠夫。今は何をしてゐるんだい？

歌津子。此處へ来て、斯うして立つてますの——

湖水の方を見て。

忠夫。矢張り聴れてるかい？

歌津子。少し曇つて來ましたわ。雨にもならないでせうが。

忠夫。向うの山の、ずっと向うの山は見えないかい？

歌津子。ええ、見えなくなりましたわ。

忠夫。風も少し出たやうだね。とにかく此涼しさは、眞夏とは思はれないね。浴衣一枚ぢや涼し過ぎる位だ。

歌津子。先刻御睡みの時も、餘程、何かお掛けしようかと思つたんですけれど。

忠夫。なあに。それほどでもないよ。(耳を澄ますやうにして) 何だらう？ あの音は。

歌津子。(同じく耳を澄ますやうにして) あれですか？ ポートですよ。風が出かかつたものだから、急いで歸つて來るんでせう。(短き間) 眞白く塗つたポर्टに、乗つた人も眞白な服を着て、白い鳥か何かが逃げ出して來るやうだわ。

忠夫。それぢやもう社の前の石の鳥居や、石燈籠や、大きな赤松なんぞは水に映つて見えな

い。

歌津子。だけど、あの横の黄色いペンキ塗りの可愛い建物は、何時もより近くなつて、判然と見えるわ。そして、あら！ 何時の間にか雲がちぎれて、あんな綺麗な光が湖水一面に！

忠夫。(椅子から半ば身を起して) ううむ。見えない俺の目にも歴々と見えるやうだ。むかし、よくやつて來た處だからな。

歌津子。(忠夫の方へふり向いて) だけど——

忠夫。つまりませんか？ 俺はちつともつまらないよ。斯うしてお前の目で、晴れたり曇つたりする外の景色を、その時その時見て貰ふ俺には、別に自分の目で物を見るにも及ばないやうに思ふんだ。

(二人とも暫く無言。歌津子、欄干を離れ、忠夫の横に來て坐る。一冊の書物を取り上げて膝に置き、そのまま弄し俯いてしまふ。)

度々言ふ事だが、俺は此目を失くした代りに、二つの目よりも、つと価値のある物を自分の物にした。(間) 俺はこんな身の上にな

つたばつかにしに、此幸福を得られたやうにさへ思ふんだ。

(歌津子、ただ太息を漏らすのみ。)

こんな事を言つても、氣を悪くしちや困るが、實際俺は、この幸福が俺の手に入るかどうか不安に思つてゐたんだからな。これと云ふ理由もなく、お前が果して本當に俺のところへ來てくれるかしらと、少尉の服を中尉の服に脱ぎ更へた時分からも、始終俺の氣になつてゐたんだよ。

(歌津子、依然として太息を漏らすのみ。)

つい先達てのやうに思つてゐるが、早いものだね—— かれはれもう、半歳近くも前の事になる！ お前がお前の家をぬけ出して、俺の處へ來てくれたのは！ あの治りかけた傷の爲めよりも、絶望の爲めに瘦せ細つてゐた俺の此手を、お前の(手)探りするやうにしながら、その温かい手の中に置いてくれたのは！

歌津子。(苦しげに) あの時の事なんか、もう考へないことにしませうよ！

忠夫。(歌津子の言葉を耳にも入れなかつたかのやうに) 俺には伯母に當つてゐるお前の繼母自身さ、俺が斯うなつてしまつては、流石に賛成しかねた結婚なのに係はらず—— そ

つたばつかにしに、此幸福を得られたやうにさへ思ふんだ。

(歌津子、ただ太息を漏らすのみ。)

こんな事を言つても、氣を悪くしちや困るが、實際俺は、この幸福が俺の手に入るかどうか不安に思つてゐたんだからな。これと云ふ理由もなく、お前が果して本當に俺のところへ來てくれるかしらと、少尉の服を中尉の服に脱ぎ更へた時分からも、始終俺の氣になつてゐたんだよ。

(歌津子、依然として太息を漏らすのみ。)

つい先達てのやうに思つてゐるが、早いものだね—— かれはれもう、半歳近くも前の事になる！ お前がお前の家をぬけ出して、俺の處へ來てくれたのは！ あの治りかけた傷の爲めよりも、絶望の爲めに瘦せ細つてゐた俺の此手を、お前の(手)探りするやうにしながら、その温かい手の中に置いてくれたのは！

歌津子。(苦しげに) あの時の事なんか、もう考へないことにしませうよ！

忠夫。(歌津子の言葉を耳にも入れなかつたかのやうに) 俺には伯母に當つてゐるお前の繼母自身さ、俺が斯うなつてしまつては、流石に賛成しかねた結婚なのに係はらず—— そ

つたばつかにしに、此幸福を得られたやうにさへ思ふんだ。

(歌津子、ただ太息を漏らすのみ。)

こんな事を言つても、氣を悪くしちや困るが、實際俺は、この幸福が俺の手に入るかどうか不安に思つてゐたんだからな。これと云ふ理由もなく、お前が果して本當に俺のところへ來てくれるかしらと、少尉の服を中尉の服に脱ぎ更へた時分からも、始終俺の氣になつてゐたんだよ。

(歌津子、依然として太息を漏らすのみ。)

つい先達てのやうに思つてゐるが、早いものだね—— かれはれもう、半歳近くも前の事になる！ お前がお前の家をぬけ出して、俺の處へ來てくれたのは！ あの治りかけた傷の爲めよりも、絶望の爲めに瘦せ細つてゐた俺の此手を、お前の(手)探りするやうにしながら、その温かい手の中に置いてくれたのは！

歌津子。(苦しげに) あの時の事なんか、もう考へないことにしませうよ！

忠夫。(歌津子の言葉を耳にも入れなかつたかのやうに) 俺には伯母に當つてゐるお前の繼母自身さ、俺が斯うなつてしまつては、流石に賛成しかねた結婚なのに係はらず—— そ

つたばつかにしに、此幸福を得られたやうにさへ思ふんだ。

(歌津子、ただ太息を漏らすのみ。)

こんな事を言つても、氣を悪くしちや困るが、實際俺は、この幸福が俺の手に入るかどうか不安に思つてゐたんだからな。これと云ふ理由もなく、お前が果して本當に俺のところへ來てくれるかしらと、少尉の服を中尉の服に脱ぎ更へた時分からも、始終俺の氣になつてゐたんだよ。

(歌津子、依然として太息を漏らすのみ。)

つい先達てのやうに思つてゐるが、早いものだね—— かれはれもう、半歳近くも前の事になる！ お前がお前の家をぬけ出して、俺の處へ來てくれたのは！ あの治りかけた傷の爲めよりも、絶望の爲めに瘦せ細つてゐた俺の此手を、お前の(手)探りするやうにしながら、その温かい手の中に置いてくれたのは！

歌津子。(苦しげに) あの時の事なんか、もう考へないことにしませうよ！

忠夫。(歌津子の言葉を耳にも入れなかつたかのやうに) 俺には伯母に當つてゐるお前の繼母自身さ、俺が斯うなつてしまつては、流石に賛成しかねた結婚なのに係はらず—— そ

つたばつかにしに、此幸福を得られたやうにさへ思ふんだ。

(歌津子、ただ太息を漏らすのみ。)

の他の親類縁者一同があれば反対したに係はらず——

歌津子。もう、あんな話はいしないで下さいな！

忠夫。いや、これだけは幾度でも繰返す！ 繰返さないやゝゐられないよ。自分とこの息子の嫁にしたがつた叔父さんが、お前のどうしても俺の處へ来ると言ひ張る我儘を理由に、保管されてゐたお前の財産を引渡せないと言つて、あれほど威嚇したに係はらず、お前は本當に身一つで、此俺のところへ飛び込んで来てくれた。ただ生きて行くと云ふことさへ、自分一人の力には及ばなくなつてゐた俺のところへ来てくれた。あの時俺は、お前の健氣な、やさしい覺悟をきいたとき、俺はもう此胸が、一杯になつてしまつて、なんにも言へなくなつて！

歌津子。もう可愛いわ！

忠夫。俺は唯だお前の手を押し戴くやうにして——

歌津子。もう、堪忍して下さいな。あの時分の事を考へると、何だか悲しくなるんですから。忠夫。悲しくなる？ どうして？

歌津子。どうしてでも！ 何だか悲しくなるんですから。

忠夫。近頃は、よくそんな事をいふやうになつたね。(問)あの時分の話をするのが、どうしていけないだらう。

歌津子。本當を云へば、あの時分の話ばかりぢやないわ。過ぎ去つた昔の話をするのは、みんないけないわ。

忠夫。過ぎ去つた昔の話をするのは——みんな！ ふむ。

(忠夫。腕組みして考へ込む。暫くの間沈黙。)

忠夫。(歌津子を捜索する如き様子をしながら)歌津子！ (問)歌津子！ お前は、もしかしたら——

歌津子。(稍や驚きの面を上げて)え？ 何ですか？

忠夫。お前は悔いてるんだな、取り返しのない事をしたと思つて後悔してるんだな。

歌津子。(短き間を置いて、決然)いいえ。

忠夫。別に後悔しちやゐないと云ふのかい！

歌津子。ええ。

(暫くの間、二人とも無言。)

忠夫。それぢや、お前は何處か體の工合でも悪いんだ。(問)あの快活だったお前が、結婚すると間もなく——然うだ、間もなくと云つ

ても可い——もとほど快活でなくなつた。そしてそれから後、だんだんと元氣がなさうに見える。

歌津子。然うでせうか？

忠夫。うむ。精一杯元氣にしようと思つてゐるにも係はらず、どうしても元氣になれぬやうだ。

歌津子。本當にどつかが悪いのかも知れませんか。

忠夫。東京へ歸つたら、一遍よく診て貰ふことだね。

歌津子。ええ。

忠夫。(再び横になりながら)風がなくなつた。また晴れたかい？

歌津子。(良人の言葉には答へずして)貴郎！

忠夫。何だ？

歌津子。私は歸りたくなりました。

忠夫。歸る？

歌津子。ええ。今晚の汽車でも直ぐに。

忠夫。どうしたんだ？ 急にそんな氣になつて！

歌津子。急にちやありません。本當は此方へ来た、あの晩からもう歸りたくなつてゐたのです。

忠夫。でも、お前は自分から此處へ来たいと言ひ出したんだぜ。しかも、あれほど熱心に主張したんぢやないか？

(歌津子、答へず。)

それに、昨日は、みつるにも来るやうにつて手紙を出した筈だ。

歌津子。(太息を漏らして) 然うでしたねえ。

忠夫。貞雄にしたところで、折角連れ出して来て、一週間にもならない内連れて歸るんぢやあんまり可哀想ぢやないか？

歌津子。然う仰しやれば、何だか歸るわけにも行かないやうですわねえ。

忠夫。兎に角もう少しゐなくちやいけないよ。體の爲めにも、此邊の空氣はきつと惡くないだらう！

(此時貞雄入つて来る。)

歌津子。おや、御歸んなさい。

貞雄。今ねえ、仲子さんが来るよ。

歌津子。えッ！ 仲子さんが？

貞雄。ああ。僕は蟬をさしてんだが、『貞雄さんなの？』つて言ふから、ふり向いて見ると

あの人なんだ。

歌津子。それから？ そして今何處にあるの？

貞雄。下で電話が何か掛けてたよ。もう上つて

来るだらう。

忠夫。仲子つて、何かい？

歌津子。貴郎も病院で一二度御會ひになったことのある——

忠夫。ああ、例の『新しい女』だね。

歌津子。ええ、貴郎はあの人を、あんまり御好きぢやありませんでしたねえ。

忠夫。(物につかまつて起ち上りながら) 俺は散歩にでも出て来よう。

歌津子。然うですか。(間) それぢや貞雄さん、御一緒に上つて下さいな。

貞雄。姉さん達は行かない？

歌津子。ええ。でも、下まで送つてあげるわ。

(貞雄、先きに立ち、歌津子、忠夫の手を引いて出づ。入り代りに女中二人ばかり入り来りて、座敷を片付ける。)

女中甲。一寸。随分變つてゐるのねえ？

女中乙。何が？

女中甲。何が？ 下で今、電話をかけてる人よ。

女中乙。あの變癡奇倫な頭髮の事？

女中甲。頭髮はかしぢやないわよ。一體に、あの様子つたらないぢやないかね。私、初めは支那人かと思つたのよ。

女中乙。さう云へば何だか、口の利き工合なんかまで、日本人ぢやないやうね。

女中甲。だけど、可笑しいわねえ——此處の奥様のやうな立派な方のお友達だつて云ふから。

女中乙。およし。もう。足音が聞えてよ。

(歌津子、仲子を伴ひて入り来る。女中

等出て行く。)

歌津子。本當に喫驚しましたわ。

仲子。私が飛び込んで来たことをですか。

歌津子。ええ。

仲子。でも貴女がたは御存じだつたでせう？

私達が此處へ来てゐることを。

歌津子。ええ——私だけは。(細干に近づき、

左の手を目の上にかざし、何物かを見たしかめたる後、再び仲子の方へふり返り、)

ほんの一週間ばかり前からですけれど、私だけには分つてゐましたわ——貴女がた御二人が、辰巳さんと御一緒に此湖水のそばへ来て

いらつしやると云ふことは！

仲子。辰巳さんからお手紙でも来て？

歌津子。いいえ。

仲子。(不審さうに) さう？ (間) 實は私達

からも、御知らせしやいけないいつて禁めら

れてゐたんですけれどもね。又御本人の氣が變つて、直接お手紙でも御出しになつたのかと思つてね。

歌津子。私は、まるつきり別の方面から聞きましたの。

仲子。然うですか。(間) 兎に角貴女御一人だけが御分りになつて、そして御分りになると、直ぐに御出掛けになつたと云ふの？

歌津子。ええ。

仲子。それでゐて、貴女は今日までいらして下さらなかつたのね——私達のところへ。

歌津子。ええ。

仲子。なぜ、いらして下さらなかつたの？

歌津子。だつて、家を出ると直ぐからもう、出なければよかつたと思ひましたもの。

仲子。でも、此處までいらした位なら。

歌津子。此處へ來てからは、一層悪い事をしたやうに思ひましたわ。

仲子。でも、貴女が辰巳さんに會つて、なぜ悪いでせう？

歌津子。なぜと云つて、武田はなんにも知らな

いで連れ出されて來てゐるんですもの。仲子。連れ出してからでも、本當の事を仰しやつてしまへばいいに。

歌津子。それや餘程、然うしたかつたわ——あんまり苦しいのですから。

仲子。仰しやつてしまへば、何でもない事でせう——辰巳さんに貴女が會つたつて、ただ會ふだけの事なら！

歌津子。私が武田に本當の事を言つてしまひた

いのは、あんまり苦しいからですわ。言つて

しまつた後で、會ひたい人に會はうと云ふやうな、そんな積りぢやないわ。

仲子。つまらない！ そんな道德の幽霊なんぞを、貴女はやつばし恐がつてゐるのねえ。

歌津子。私の道德なんて、そんな小難かしい物ぢやないと思ふわ。

仲子。でも、やつばし、善い事だとか悪い事だとか言つてゐるでせう？

歌津子。だけど——

仲子。だけど、どうしたと云ふの？

歌津子。だけど武田は——(ハンカチーフを顔に當てて) 武田は可哀想な人ですもの。

仲子。相變らずねえ——貴女は。

(歌津子 沈黙。)

今村がいつもよく言つてゐるわ——歌津子さん

て人は、強さうに見えて實際は弱い人なんだ

つて！

(歌津子、依然として沈黙。)

それにしても貴女の結婚は、どうしても私達には呑み込めなくつてよ。(間) 初めあんなにまで逃げ廻つてゐた結婚を、しかも武田さんがあんなに成つた後、貴女自身から進んで是非ともすると言ひ張つたんですつてねえ。

歌津子。仲子さん、貴女もまた、あれを問題にするんですか？

仲子。折があつたら是非是非言ひて見たいと思つてゐたわ。(間) やつばし武田さんを可哀想な人だと思つたからなの？ お氣の毒と思つたの？

歌津子。それはお氣の毒とも思つたわ。

仲子。誰よりもお氣の毒と思つて。

歌津子。いいえ。もつとお氣の毒な人があるかも知れないことは、私だつて考へてゐましたわ。

仲子。然う？

歌津子。それに武田をだつて、今氣の毒に思つてゐるほど、あの時は思つてゐなかつたの。

仲子。それでゐて——

歌津子。どうして此結婚なんかしたかと仰しやるの？

仲子。ええ。呑み込めないわ。

歌津子。(微笑しながら) よくは 自分にも分らないけれど、きつと私の持前の……つまらない負嫌ひからだと思ふのよ。

仲子。負嫌ひつて？

歌津子。他の人に出来さうもない事なら、尙ほのこと、自分にやつて見たかつたの。そして、もう入らないでも可いと云はれた籠の中へ、自分から飛び込んで行つたのよ。

仲子。さうでせうか？

歌津子。勿論そればつかしぢやないわ。私はねえ、あんな不幸な良人の世話をか、よい女の手に一つにして行くと云ふ、柄にもない烈婦の役割が引受けて見たかつたの一す。そんなつまらない夢を見てゐたのです。

仲子。つまらない夢を？　そして其夢がさめたと云ふの？

歌津子。ええ。

仲子。どうして覺めたの。

歌津子。結婚して間もなく、私は前通りなんにもしないであつて、私達二人の生きて行かれることを知りましたもの。貴女があのやうに、パンの爲めに働かないでもゐられることをね。

仲子。(暫く考へて) 辰巳さんから提供され

た澤山のお金を、武田さんが貴女に内密に受取つてゐたと云ふことですな。

歌津子。ええ。武田はきつと辰巳さんの御心持を尊重した爲めでもあり、出来るだけ私の重荷を軽くしてやらうと思つた爲めでもありませうよ。だけど私には、これが大きな幻滅の緒でしたの。

仲子。(うなづきながら) 貴女のやうな性格としてはねえ。

歌津子。それから又私の結婚も、それが濟んではたただ、同情と、憐憫と、偶には少しばかりの尊敬とで迎へられるだけでした。あれほどにやかましく言つた近親の者なども、もう私を非難しては呉れませんでした。

仲子。それは然うでせうね。

歌津子。ですから私は……私は何だか物足りなくなつて來ましたの、つまらなくなつて來ましたの。

仲子。其御心持は、私にも分るやうだわ。

歌津子。ですから私は……(間)もう止すわ。自分の事はつかし！

仲子。止さないでもいいことよ。

歌津子。でも、もう止しましよ——私の話は、それよりも聞きたいのは！

仲子。辰巳さんの事？　お話するわ。(間) 貴女、辰巳さんが貴女がたの所へ顔を出さなくなつてから、ひどく頭の加減を悪くしてしまつたことを御存じですか？

歌津子。薄々耳に入つてはゐましたわ。どつかの精神病院へ入院していらしたつてことも、それぢや本當でしたのね？

仲子。ええ。だけど、其後全然よくなつたの。退院してから私達二人で此方へ附いて來たんですけれど、此頃ではもう私達の用事はなんにもないの。

歌津子。然うですか！　そんなによくなつていらつしやるの？

仲子。ええ。(起ちながら) 私、もう一遍電話をかけて見ませうかしら？

歌津子。何處へ？

仲子。何處へつて——私達のある處へですよ——辰巳さん達ももう歸つてさうなものですから。

歌津子。(愕然として) えッ！　仲子さん、貴女先刻辰巳さんとこへかけたの？

仲子。ええ。(間) 生憎辰巳さんも今村もゐませんでしたから、宿の人に傳言して置きましたの——貞雄さんに出會つて、それから此處

へ來てゐるつてことをね。

歌津子。まあ!

仲子。ですから、辰巳さんも其内來るかも知れないわ。

歌津子。どうしよう! (起ち上り、寢椅子のところへ行つてかけ) 私本當にどうしよう!

仲子。いけなかつたの? (間) 諦めてお仕舞ひなさいよ——どうせもう斯うなつちや。

歌津子。(再び起ちて欄干へ行き、春仲びをするやうにして右手の岸邊を眺め) 何だか、あの二人連れのやうだわ! あら、もう歸りかけてゐるやうだわ! 仲子さん、済みませんけれども……

仲子。私が牽制運動に行くの?

歌津子。後生だから。そしていつと、いつとゆつくり遊んで來るやうにね。直ぐに歸つて來ないやうにね。

仲子。はい、はい。畏まりました。

(仲子、大急ぎで出て行く。歌津子、ただ一人になつて、愈々落ちつきをなくする。幾度か起つたり坐つたりのあと、不圖思ひ出して鏡に向ひ、髪のはつれをかき上げなどしてゐる折柄、俄に人の上り來る様子。)

女中。(人を案内するものの如く外より) こちらでございます。

歌津子。(絶望的の期待を以て、入口へ迎へに入る) どうぞ御入り下さいまし。まあ! みつるさんだつたの。

みつる。御手紙を戴いて、直ぐに出掛けて來ましたわ。

歌津子。私、貴女だとは思はないものだから! まあ、よかつた!

みつる。貴女、何方を御待ちになつてたの?

(歌津子、答へず。)

何方がいらつしやる筈だつたの?

歌津子。いいえ、別に。何でもない事です。よ。(短き間) 私やつぱし、誰よりも貴女のいらつしやるのを待つてましたわ。

みつる。またお風邪で、臥せてたんですけれど。

歌津子。まあ、然う? そんなの、よくねえ。みつる。私ねえ……夢を見ましたの。

(斯く言ひながら、湖水の方へ目を走らす。)

歌津子。然う? どんな夢だつたの?——それは。

みつる。一寸、待つて下さいな。

(みつる、欄干に近く進み、一心に湖水を見入りに暫くの間言葉なし。)

歌津子。(同じく欄干に近づき) みつるさん、貴女は此方へは初めてね? あら、どうしたの?——そんな様子をして!

みつる。(歌津子には答へずして) 不思議だわ。本當に不思議だわ。

歌津子。何が不思議なの?——そんなに。

みつる。私、この通りの、これとちつとも異はない湖水、夢に見ましたもの。水の色まで丁度この通りの青い色でしたの。

歌津子。まあ!

みつる。そして此欄干にもたれてゐると、この水の底から何だか知らないけれど、頻りに——

歌津子。どうしたの?

みつる。何だか知らないけれど、頻りに私の名前を呼ぶんです。

歌津子。まあ! 貴女の御名前を——湖水の中から?

みつる。ええ。そしてそれが、丁度溺れかかつてる人かなんぞのやうな、それや可哀想な聲なの。

歌津子。(欄干を離れて體を震はせながら 恐いこと!)

みつる。私も恐くて目が覺めたわ。だけど目が覺めてからも、ただの夢とばかりは思はれなかつたの。そして、其湖水がどうしても貴女がたの行つてらつしやる處に異ひないと思へたの。

歌津子。そして？

みつる。そしてね、恐い癖に何だか行つて見たくなりましたの。

歌津子。ぢや、丁度そんな處へ私の手紙が行つたのですね？

みつる。ええ。

歌津子。不思議ですわねえ。

みつる。だから、臥せつてゐたのを構はず、飛び出して來ましたの。

歌津子。それぢや、私が歸りたくてたまらなくなつた時、みつるさんは來たくてたまらなくなつてたんだわ。

みつる。あら、貴女は歸りたい？

歌津子。ええ、何だか淋しくつて、無暗に淋しくつてたまらなかつたの。

みつる。然うですか？

歌津子。でもね、貴女にでも來て頂いたらと、然う思つたの。

みつる。然うですか？

歌津子。だけど、今日はもう、今ぢやもう我慢が出来なくなつてゐる處なの。

みつる。そんなに淋しくつて？——ここが。

歌津子。ええ。本當に淋しくつて、そして恐くつて！

(二人とも暫く無言。)

みつるさん、私ね、本當は今、恐い人が來るのを待つてるところなの。

みつる。然うですか？——やつぱし。

歌津子。えッ！それが貴女に解つて？

みつる。何だか然うらしいのね——貴女の御様子。

歌津子。でも、本當に恐い人が來るんですもの。(短き間)貴女に、それが誰だか解つて？

みつる。さうね、何だか解るやうだわ。

歌津子。ぢや、誰？

みつる。(湖水の方をちらりと一瞥しながら)あの——辰巳さんでせう。

歌津子。(驚いて)まあ！誰から聞いたの？

みつる。誰からも。

歌津子。それでゐて、どうして？

みつる。ただ、何となくそんな氣がしたわ。(苦しげに胸へ手をやりながら)何だかそんな氣がするわ。(起ちて欄干に近づき、ちつと耳を

澄ますやうにして)あら！あの聲が！あの可哀想な聲が！(間)歌津子さん、貴女は聞えない？

歌津子。(身震ひしながら)聞えないわ——なんにも。

みつる。まあ！あの可哀想な、悲しさうな聲が聞えない？

歌津子。(不安と恐怖とに全然取り亂して)みつるさん、私も堪らない！忠夫さんと呼んで來るわ！

(歌津子、迷ぐるが如く室を去る。みつるは苦しげに胸を抱きながら、欄干に沿つて右に往き左に往きしてゐる。やがて雲の間より強き日光を落し來り、湖水よりぱつと照り返す。みつる、立ちどまり、眩さうにして後にふり返り見れば、辰巳一郎、無言の儘座敷の中程に立ちてあり。手には袋に包みたる棒の如き物を携へたり。)

みつる。(驚かずして)いらつしやいまし。

(一郎、ただ二三歩を進み出でしのみ。無言。)

何時の間にいらしたの？

一郎。歌津子さんはゐませんか？

みつる。先刻まで此處におましたわ。

(一郎、無言の儘、棒のやうな物を袋より取り出す。)

鐵砲ですのね——あの時の！

一郎。これを持って来いつて云ふから、持つて来たんです。

みつる。何方が？

一郎。歌津子さんは、あれが私の過失だつたと云ふことを疑つてゐるんです。いいえ、たしかに疑つてゐる。だから、私が嫌だと言ふのにどうしても、これを藏つて置けと言つたんだ。(短き間)だが、歌津子さんはかしやないと言つたな……うむ。(銃の臺尻をとんと臺の上について)みつるさん、貴女はどう思ふ？ やつぱし、過失ぢやないと思ふ？

みつる。いいえ。

一郎。(みつるの言葉が耳に入らなかつたかのやうに)貴女もやつぱし、過失ぢやないと思ふんですね？

みつる。いいえ、然うは思ひませんわ。

一郎。えッ！ 然うは思はない！

みつる。ええ。

一郎。(銃を杖につき、ちつと考へ込む。暫くありて)みつるさんは、あの時見てゐたのか

い？

みつる。いいえ。

一郎。ふむ。それでゐて貴女は、あれが怪我だつたと云ふことを信じて呉れる？

みつる。信じるわ。たしかに信じるわ。

一郎。だが、見ないでゐて、どうして信じられる？

みつる。だつて、見ないから——見ないから——信じるんだわ。

一郎。ふむ。見ないから——信じる！ 見ないから信じる！

(二人とも暫く無言。一郎、室内をぐるぐる廻り歩き、寢椅子の上にを下ろす。)

(突然笑ひ出し)ははは、つまらない事を考へ出したものだ。つまらない！ 今になつてもう遅い。

みつる。遅いと仰しやるのは？

一郎。(ちつとみつるの目を見つめながら)みつるさんは、死にたいと思つたことがあるかい？ 死にたいと思つた事が？

みつる。ええ。

一郎。ある？ どんな時然う思つた？

みつる。私、始終然う思つてましたわ。

一郎。ふむ。いつからだ？——然う死にたいと思ひ出したのは。

みつる。(横を向きながら)初めて——御目にかかつた、あの時から！

一郎。え？ 初めて私に會つた……私が初めてみつるさんに會つた時……ふむ。(間)私はもう一度ずいんとやり度くなつた。みつるさん、貴女の其處(胸を指さし)にゐる奴を退治て上げようか？ 其處にも悪い奴が入つてゐる！ さうだ、悪い奴がはいつてゐる！ (短き間)こつちへいらつしやい……もつとこつちへ。うむ、然うだ。

(みつるの指さされた處へ行き、徐に眼目して立つ。一郎、銃を構へてみつるの胸部を狙ふ。)

今に見ろ！ 畜生奴！

みつる。(不圖目を開き)辰巳さん！

一郎。(銃口を上にな立てて)何です？

みつる。彈が込めてありましたか？

一郎。(愕然として驚き)彈？

みつる。其銃には彈が込めてありましたか？

一郎。ああ！ 然うだ。彈が込めてなかつた！ 此銃には彈が込めてなかつた！ (銃をがたりと投げ出して)やくざな銃だつたな。こんな

やぐざな銃だつたかなあ!

(一郎泣く。みつる、胸を抱きながら立ち上り、見物に見えざる欄干の隅へ行く。)

一郎、泣き止みて四邊を見廻し、やつとみつるの在るところを見出す。)

みつるさん、どうした? 何か聞えるのかい? — そんな様子をして。

みつる。ええ。もう堪らなくなつたわ——あの聲が:

一郎。あの聲?

みつる。(悲鳴を擧げて) ああ! どうしよう?

——あの可哀想な聲が。湖水の中から、あんなに可哀想な聲をして! ああ、もう斯うしちやゐられなくなつたわ!

一郎。(突然跳び上り、みつるの方へ駆け出しながら) あッ! あ、みつるさん! みつるさんはもう飛び込むのか——私より先きに飛び込むのか?

(二人の前後して身を投げるとききの物音。暫くありて階下に喧噪を生ず。さき程より既に曇りゐたりし湖水の面は、今にも大雷雨となりさうに暗くなつて来る。やがて今村順 第一幕の時と略ぼ同じ服装にて入り来り、先づ投げ出されたる銃を

取り上げて見、更に欄干よりのぞいて見、それから引き返して来て寝椅子の上にかい、腕組みをして、ぢつと考へ込んだり、太息を吐いたりしてゐる。そこへ歌津子夢遊病者の如く茫然として出て来る。)

順。(歌津子を見て) 歌津子さん、妙な事になりましたねえ!

(歌津子、無言の儘順のそばへ駆け寄り、寝椅子の端に突伏してしまふ。)

あの時は、いくら考へて見ても思ひ出せなかつたが、ねえ、歌津子さん、あの繪の中の女は——みつるさんでしたね。あの、頭の處に圓光をかざした女は、みつるさんでしたね。(短き間) どうも、あの聲が、少し巧過ぎると思ひましたよ。

(歌津子のむせびなく聲のみ聞ゆ。)(幕)

(一九一七年九月)



勿論當世向きでない、季節はづれの心掛ではあるが、私などは平生からして、貴族的な瘡我慢、貴族的な謙恥心、貴族的な品位といふやう

なものを、出来るだけ餘計に持ち合せてゐたい。ほんの少しばかりでももつてゐ、奴はなくしたくないものだと思つてゐる。つまり柄にもなく自ら一種の貴族を以て任じようとするので、まぎれもなき貴族主義者である。

だが、他方では、自分だけ、少數の自分達だけ貴族であつては面白くない。一人で餘計に自分達同様の貴族を造りたい。出来ればすべての人々をこごとく皆自分達同様以上の貴族にしてしまひたい。とさうも考へないではゐられない。つまり本當は、自分達だけ別になつてゐたくはないので、その點からいへば、いはゆるアリストクラシイの反對デモクラシイの信奉者でもあり得るのである。

ただ當世向きの、新しいデモクラシイといふ奴は、瘡我慢とか、謙恥心とか品位とかいふやうな古風なものを、自分達が持ち合せてゐないだけでなく、すべての人々にも放擲させてしまはうとするのである。自分達も立派な貴族になりきつてしまはうとするよりも、むしろすべての貴族をもあましましき賤民の間にまで引きずり下ろしてしまひ、さうして一切を平等化しようとするのである。

(流行兒問題にされることなどにより)